他者の真の存在価値を賛美する人

北村愛子詩集『見知らぬ少女』に寄せて

鈴木比佐雄

北村愛子さんの第十詩集『見知らぬ少女』には、様々な困難な道を経た後に辿り着いた、原点に回帰する清新な風のごとき心持ちが感じられる。北村さんには何気ない日常で垣間見た他者の姿に、自分が自覚していなかった潜在的な存在価値を感知して、この世の一回性を抱え込んだ切実な表現力がある。しかしその表現力は、肩の力が抜けていて、他者の最も個性的な存在価値の在りかを伝えようとしなやかに試みられている。北村さんの詩作を生み出す精神性は、きっと自己の生命力を確認するために、他者の存在から学んでいることに、てらいなく感謝の言葉を捧げる天性の率直さが根幹にあるのだろう。その意味で北村さんは、年を経ても決して老成することをよしとしない、絶えず挑戦者であることを忘れない若々しい詩人なのだ。そして自分が出会った他者であり隣人であるかけがえのない人びとの存在価値を、他者に向けてその素晴らしさを語ろうとする詩人なのだ。

新詩集は四章に分かれている。I章「見知らぬ少女」十四篇には、多様な他者の存在を発見した感動が正確に伝えられている。タイトル詩の「見知らぬ少女」は、プールから上がった少女の素肌が水滴を弾き飛ばすほどのみずみずしさを絶妙に描いている。

見知らぬ少女

どうして　油は　水をはじくのだろう
油がのると

どうして　つややかに輝くのだろう

水滴を　油がはじいているのか
ひきしまった　小麦色の
その皮膚の　背中いちめん
水滴が　無数の玉になって
ころころと　玉になって
おちもせず　キラキラと　ひかっている

水着の少女のすんなりした姿態
かたい蕾のような　ひきしまった　からだ

今　プールから　あがったばかりの
濡れた　つややかな黒髪
したたりおちる雫
うるしのようにひかっている　からだ

抜手をきって　泳ぎぬいたあとの充実
緊張した筋肉の美しさ

油にのって　油がうちがわから
にじみだしている背中

無数の水滴を宝石のようにひからせている
見知らぬ少女

北村さんの精神がこの世の最も美しい存在に感動して、一気にこの詩が生まれたに違いない。初めの一行「どうして　油は　水をはじくのだろう」に込められた不思議な感動が読むものを自然にこのプールサイドに立たせてしまう。この「どうして」という問いのさりげなさこそが、この詩にリアリティを与えている。少女の内側から発する清らかな油にまとわりつく水滴が、素肌に留まり宝

石のように光り輝くのだろう。このような人間の身体と命の水が織りなす瞬間を「緊張した筋肉の美しさ」と語っている。少女は自らの美しさに気付いていない。しかし傍らの人びとは、その美しさに実は気付いている。北村さんは本当に美しいものを美しいと言える人だからこそ、このような誰もが経験しているけれども、今まで詩に書かれていない情景を詩にできたのだと思われる。北村さんのいう「見知らぬ少女」は、私たちの傍らにいる少女や少年でありながら、実は北村さんの中に今も潜んでいる「見知らぬ自分」なのかもしれない。それは現代の情報社会において化粧や衣装などのファッション情報が過度に溢れて、真の美しさや装いが何であるか分からなくなっていて、自分らしさよりも時代に流されている若い人間たちも多いだろう。その意味でも詩「見知らぬ少女」は真の自分らしさとは何かを問いかけ考えさせてくれる名作だと私には感じられた。

二篇目の詩「海女の指先」は、五人の海女の指先が映し出されたテレビを見て、その働きすぎて指先が変形して曲ってしまう「ヘバーデン結節」の痛みを我が身に引き寄せながら、「海の女の勲章」だと語っている。この詩篇も労働現場の厳しさを生き抜いてこられた北村さんだからこそ書きえる詩篇だろう。その他のⅠ章の詩篇は、娘や夫など家族のこだわりに潜む人間の安らぎを大切にしていく生き方を記している。そして草木や花々の中に変わらぬ命の営みの中に家族の歩みを重ねて、真の生きる強さを物語っている。

Ⅱ章「秋の午後」十一篇には、北村さんの持病である「変形性関節症」のリハビリ中に出会った人たちとの交流などが描かれていて、困難な情況の中でも前向きに生きている存在によって、逆に読む側が励まされる気がする。

また冒頭の詩「にこにこしなきゃあ　あかんなあ」という詩は、このタイトル自体が生きている誰もが困難を抱えているのであり、それでも自らに笑顔を取り戻す努力をすべきだという希望のメッセージを伝えている。最近の日本が置かれている様々な異常な犯罪や自殺者が相変わらず三万人以上で推移している社会情況の中だからこそ、知恵を出しあい次のような希望のある社会を作っていきたいと語っている。「生きているうちに／生きていてよかった／楽しかったって／にこにこ声だして／笑えるようにしなきゃ／あかんなあ」。北村さんの願いであり多くの人びとが心に願っていることを物語っている。

最後の詩「秋の午後」では、陽射しが弱くなってきた秋の日の午後を人生の晩年と重ねながら、紫式部の紫の実も、若い母も、おばあさんも、おじいさんも全ての存在が秋の日に賛美されている光景を記していて心があたたまる詩篇だ。

Ⅲ章「風のいたずら」十二篇は、地域社会の人間関係が希薄になることが、人間社会にとって最も危険な兆候であること指摘している。詩「近頃は」と「どうなってるの？」は、学校帰りの子供たちをさらう不審者が出没して、広場や公園で遊ぶこともできない社会の異常性を浮き彫りにしている。これほど地域社会の力が墜ちて来たのは、何が問題なのかとその原因を問うている。また退職した会社がより利益中心の職場環境になって多くの同僚が大量解雇されて、労働者の権利など無きがごとき情況になっていることを憂いている。子供も大人も人格など無視されて欲望や収益の道具とされている社会構造の問題点を北村さんは淡々とえぐり出そうと試みている。

また人間たちと生活している犬や猫の人間化された生態を記している「散歩」「当世の猫事情」「犬」

「犬の老後」「小鳥のパン屑」「風のいたずら」なども、微笑ましく肩の力が抜けてくる詩篇群だ。人間と動植物たちの交流もまた重要な詩のテーマになりうると感じさせてくれる。

Ⅳ章「わすれえぬこと」十一篇は、母や父を追想する詩篇や親しかった詩友、また心に残る知人たちの鎮魂詩をまとめたものだが、東日本大震災の詩二篇も最後に収められている。最後の詩「あとには泥と水たまりがあるばかりであった」は、子を宿していた母たちが地震や津波でお腹の子と共に亡くなった悲劇を描いている。その母子の生きたかった思いを決して忘れてはいけないとこの詩を記したのだろう。またもう一篇の「大川小学校」を引用してこの小論を終えたい。多くの「見知らぬ少女」などの小学生や教師たちが津波にのまれていった悲劇もまた、北村愛子さんはどうしても後世に残しておきたかったのだろう。

北村さんの詩篇をいつの世も「見知らぬ少女」のような存在の驚きを胸に秘めた人びとに読んで欲しいと願っている。また地域社会や隣人の存在を大切に感じて共に生きようと願っている人たちにもこれらの詩篇は、心に忍び込んでくるだろうと思われる。

大川小学校

宮城県石巻市大川小学校
北上川の河口から
五キロメートルほど
あがったところにあります

巨大地震のあとの
津波警報の情報が
学校に伝わっていませんでした

避難所になっているところ
誰が津波に押し流されると
想像したでしょうか

ところが濁流は
あっというまに押し寄せて来たのです

押し寄せる津波を見て
小高い丘にむかって
走った男の先生
生徒ひとりを抱きかかえて
走るのがやっとでした

助かった人はわずか
大川小学校では

子ども七十四人
教師十人
押し流されて亡くなりました

避難所になっているところ
誰が津波に押し流されると
想像したでしょうか

千年に一回という巨大地震の津波は
十メートルの堤防を
難なく乗りこえて
コンクリートの建物をも
ガレキに変え
大川小学校を
何ひとつ残さず
奪い去っていったのです

北村愛子詩集『見知らぬ少女』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社
2011